

以上のように、問題行動の早期発見のためには、性格検査に加え、親子、友人関係の検査を組み合わせ問題要因を予測し、それは前図のどの不適応要因からくるのかを明らかにしながら、子供の内面の動きを具体的につかむことが大切になろう。

(3) テスト・バッテリーを編成しての解釈と活用のしかた

——学業不振児の発見と指導を中心に——
 学校生活の中で、子供たちにとって最も深刻な

問題は「勉強ができない」「授業がおもしろくない」といったことなどがあげられる。学校生活の大部分が授業で占められていることを考えると、当然のことであろう。学業のふるわな子供たちは、学校生活全般の中で、不適応を起こしやすい。そこから多くの問題が生じることにもなりかねない。

ここでは、学業不振の背景やその指導のあり方を探るために、図2のようなテスト・バッテリーを編成してみた。

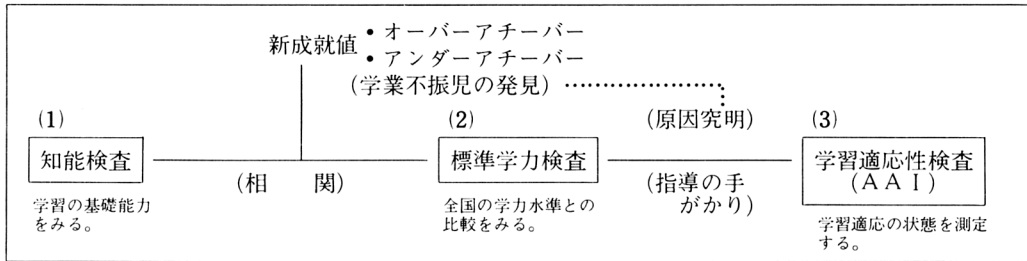


図2 学業不振児発見のためのテスト・バッテリー

① 学業不振児の発見のために (知能検査と標準学力検査の活用)

表1 知能検査と標準学力検査結果表 昭和55年5月実施 G中学校1年

No	氏 名	知 能			国 語		社 会		数 学		理 科		教 科		学 級 順 位	学 年 順 位	総 合 学 力 偏 差 値	新 成 就 値
		偏 差 値	段 階	指 数	偏 差 値	段 階	偏 差 値	段 階	偏 差 値	段 階	偏 差 値	段 階	平 均	段 階				
1 A	ク	52	3	103	69	5	54	3	65	5	48	3	59	4	10	40	51	8
2 B	リ	51	3	102	56	4	47	3	48	3	54	3	51	3	23	108	51	0
3 C	ミ	55	4	108	61	4	51	3	61	4	51	3	56	4	13	57	54	2
4 D	チ	55	4	108	57	4	51	3	57	4	53	3	55	4	15	68	54	1
5 E	ノ	51	3	102	53	3	48	3	46	3	51	3	50	3	27	124	51	-1
6 F	チ	57	4	111	53	3	48	3	59	4	51	3	53	3	19	92	55	-2
7 G	メ	48	3	97	50	3	41	2	45	3	54	3	48	3	30	140	49	-1
8 H	ミ	52	3	103	58	4	48	3	53	3	49	3	52	3	20	99	51	1
9 I	ミ	33	1	73	37	2	41	2	37	2	42	2	39	2	40	191	38	1
10 J	ユ	52	3	103	54	3	52	3	48	3	48	3	51	3	26	118	51	0
11 K	チ	57	4	111	64	4	67	5	68	5	46	3	61	4	9	30	55	6
12 L	ヒ	47	3	95	51	3	40	2	47	3	35	2	43	2	34	171	48	-5
13 M	ア	49	3	98	58	4	54	3	58	4	44	2	54	3	16	82	49	5
14 N	フ	65	5	124	56	4	51	3	47	3	50	3	51	3	24	112	61	-10
15 O	ユ	51	3	102	65	5	54	3	67	5	63	4	62	4	8	24	51	11
16 P	リ	59	4	114	59	4	50	3	54	3	50	3	53	3	17	84	56	-3
17 Q	ミ	67	5	127	69	5	72	5	66	5	56	4	66	5	3	7	62	4
18 R	ヨ	42	2	87	45	3	45	3	41	2	38	2	42	2	37	180	44	-2
19 S	マ	55	4	108	59	4	60	4	59	4	51	3	57	4	12	51	54	3
20 T	ミ	45	3	92	43	2	42	2	35	2	41	2	40	2	38	186	47	-7

一般に学業不振は、学習能力（多く知能であらわす）に比して、学業成績が低い場合をさす。判断の基準として、㉞ 標準学力検査の偏差値で50以下、指数で100以下で、知能検査の偏差値が40以上、指数で85以上に該当する場合 ㉟ 新成就値（新成就値＝学力偏差値－知能対応学力偏差値）

が－7以下の場合が考えられる。

上の表1は、知能検査と標準学力検査の結果であるが、学業不振児の発見にあたって新成就値に注目したい。判断基準㉞から－7以下にある者が該当し、これらをアンダーアチーパーと言いつつ7以上はオーバーアチーパー）学業不振児の一群